

桐島聡の生き方 描く意義は

半世紀前の連続企業爆破事件で指名手配されていた桐島聡容疑者の数奇な人生をモチーフにした映画が脚作になっている。足立正生監督の「逃走」と高橋伴明監督の「桐島です」。かつて政治運動に身を投じていたベテラン監督2人だが、アプローチは全く異なる。いずれも来年の公開を予定している。

企業爆破事件の容疑者 当時知る映画監督が競作

1960年代後半に燃えさかった政治の季節が連合赤軍事件で急速にしぼんだ74〜75年。「東アジア反日武装戦線」を名乗る組織が三菱重工や鹿島など海外に進出する企業を狙った連続爆破事件を起こした。

多くのメンバーが逮捕される中、桐島は「内田洋」という偽名を用いて神奈川県内の土木会社に約40年勤め、逃亡生活を続けた。末期がんで入院した病院で今年1月25日に「自分は桐島聡だ」と名乗り、4日後に70歳で死去した。

足立は39年生まれ。桐島より一回り上の世代だ。パレスチナで若松孝二監督と「赤軍—PFLP 世界戦争宣言」を制作後、日本赤



「逃走」の桐島聡(古舘寛治)。右は若い頃の桐島(杉田雷麟)



足立正生監督

自問自答が煮詰まる姿 深掘り

軍に参加した経験を持つ。高橋は桐島に近い49年生まれ。学生運動に参加後、若松プロで多くのピンク映画を撮る。現実の銀行強盗事件に材を取った「T.A.T.O.O(刺青)あり」などの代表作を持つ。

足立も高橋も桐島を巡る報道に接し、間髪を入れずに映画化に向けて動いた。足立は自ら脚本を執筆。高橋は前作「夜明けまでバス停で」の梶原阿貴と共同で脚本を仕上げた。

健康保険証も持たず、目立たぬように暮らしていたこと。たまに駅前の飲食店に出かけ、音楽に合わせて踊るのが好きだったこと。好意を寄せる女性に対し、「幸せにできない」と断ったこと。両作とも、こうした数少ない情報から彼の人生を組み立てている。

足立版は「動」の印象が強い。一方、高橋版は「静」で貫かれている。足立版は、入院した桐島(古舘寛治)が来し方を振り返る形で描かれる。青年時代の自分(杉田雷麟)や僧侶姿の自分と対話をしたり、かつての仲間が若いままの姿で現れたりする。

「リアリズムを追求せず、彼の回想や夢想、妄想の側から、現実を見直す映画になれば、と思いました」と足立は言う。「何もできない悔しさ、追われ続ける苦しさを深掘りしたかった。

政治に無関心な現代ヘジャブ



「桐島です」で毎熊克哉が演じた桐島聡(右)



高橋伴明監督

桐島の手配理由は、東京・銀座のビルにあった韓国産業経済研究所に「爆弾を仕掛けて爆発させ、一部を壊した」というもの。人を死なせた容疑ではない。「グループの端について、使い通りに過ぎなかった桐島が闘争を全部引き受けたことが重要だった」(足立) 政治の季節はとうに去り、今は政治に無関心であることが当たり前になっている。そんな時代に桐島の生き方を世に問う意義はどこにあるのか。

「見る人が付いてきてくれるか、正直言って心配です」と高橋。「しかしジャブは打ち続けねばならない。あっちゃん(足立)も桐島を映画にすると思き、ワンツーパンチになると思いました」

「あの頃は思想を持つのが当たり前でした」と毎熊は言う。「そしてすぐにケンカになる(笑)。面倒くさいなあと思えますけど、面倒から逃げ続けた結果が今ですから」

若者たちが社会を良くしようとする議論を重ねるうち、凄惨な結果を招く。絶望した次の世代は政治的な議論を極端に嫌うようになる。

「桐島です」の共同脚本家の梶原は全共闘世代の子供、つまり団塊ジュニアに当たる。「親の世代が何に闘いを挑み、なぜ失敗したのかに関心がある。現代を考えるにはあの時代に立ち戻らないといけないと思う」(編集委員・石飛徳博)